

医療現場の今を知り、明日の経営につなげる

WEB NEOSYS



社会医療法人玄真堂 川崙整形外科病院

世界トップレベルの医療を地域へ 高気圧酸素治療などで独自の専門性

大分県中津市 社会医療法人玄真堂 川崙整形外科病院 理事長 川崙 真人 先生

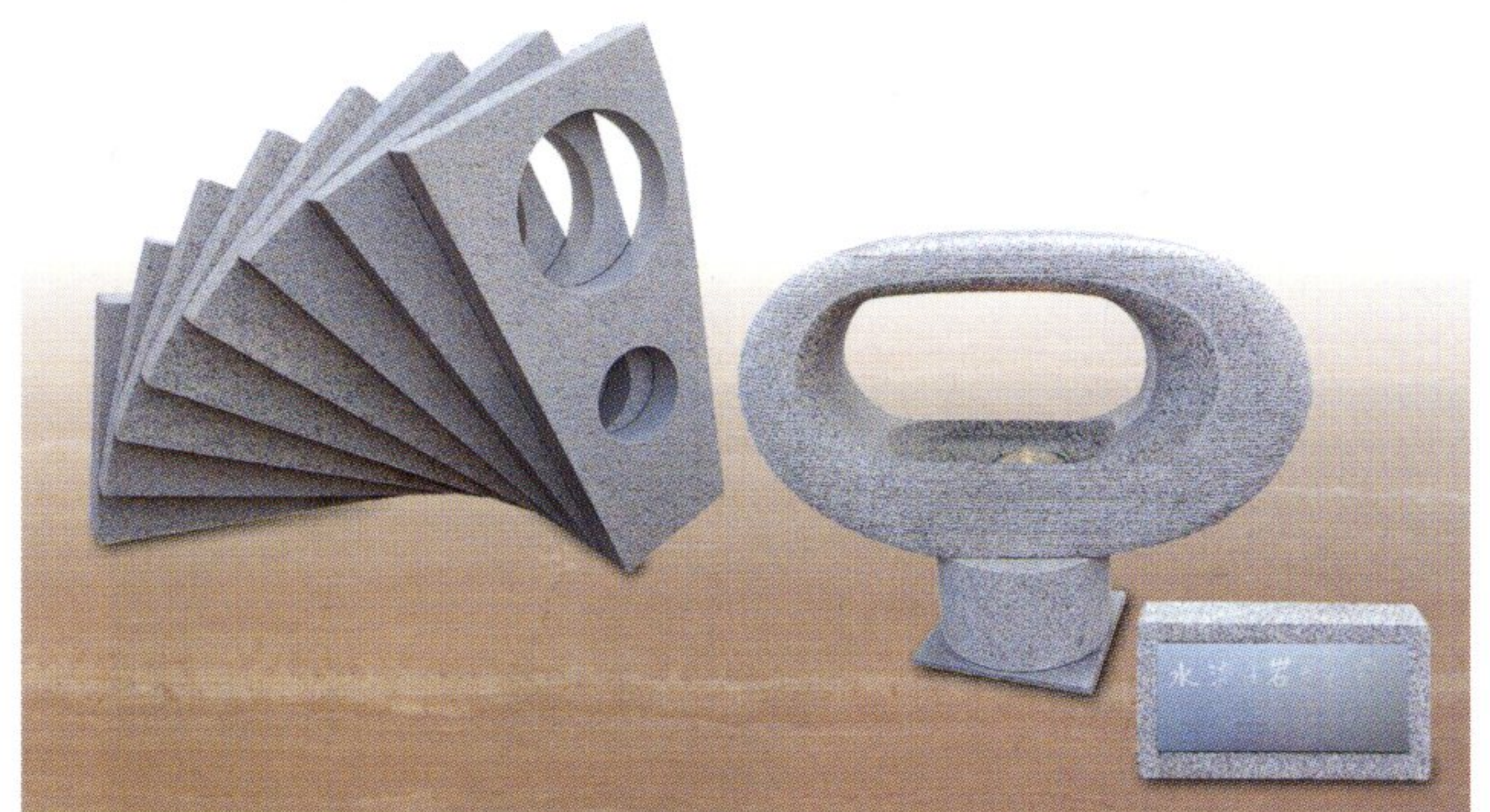
『解体新書』を翻訳した前野良沢をはじめ多数の医師、蘭学者を輩出した中津藩。そのパイオニア精神を受け継ぎ、“世界トップレベルの医療を地域へ”を目標に、1981年の開院以来、先進的な医療提供と地域貢献を続けているのが川崙整形外科病院です。高気圧酸素治療では日本の第一人者と称される理事長の川崙真人先生に話を伺いました。

■東洋哲学で病院経営を実践する

『医は仁ならざるの術、務めて仁をなさんと欲す』、川崙整形外科病院の運営方針でひときわ目を引くのは、旧中津藩医・大江雲澤の言葉を引用したこの一節です。「“医は必ずしも仁術ではない。どんな治療もまず、自ら研究、検証してから患者さんに施しなさい。そうして初めて仁をなすことができる”という意味で、医のリスクマネジメントについて江戸時代に書かれていたのです」と川崙先生は解説します。その後も“苦楽吉祥”、“敬天愛人”、“不撓不屈”などで表される東洋哲学を病院経営に活かして

きました。その根底には、“哲学を持たない人間は、医療人たり得ない”という考え方があります。実際に、職員たちは朝礼や合宿で経営哲学を学ぶことで、患者さんや社会に奉仕する意識が高まり、自主的に研鑽してボランティア活動などを行うようになりました。

同院では、早くから環境に配慮した病院づくりやリスクマネジメントにも取り組み、太陽熱、地中熱、天然ガスによる発電、冷暖房システムを完備しています。2015年9月の台風19号襲来時も、停電を免れた同院は約40名の救急患者を手術しました。現在93床（急性期7対1病床60床、地域



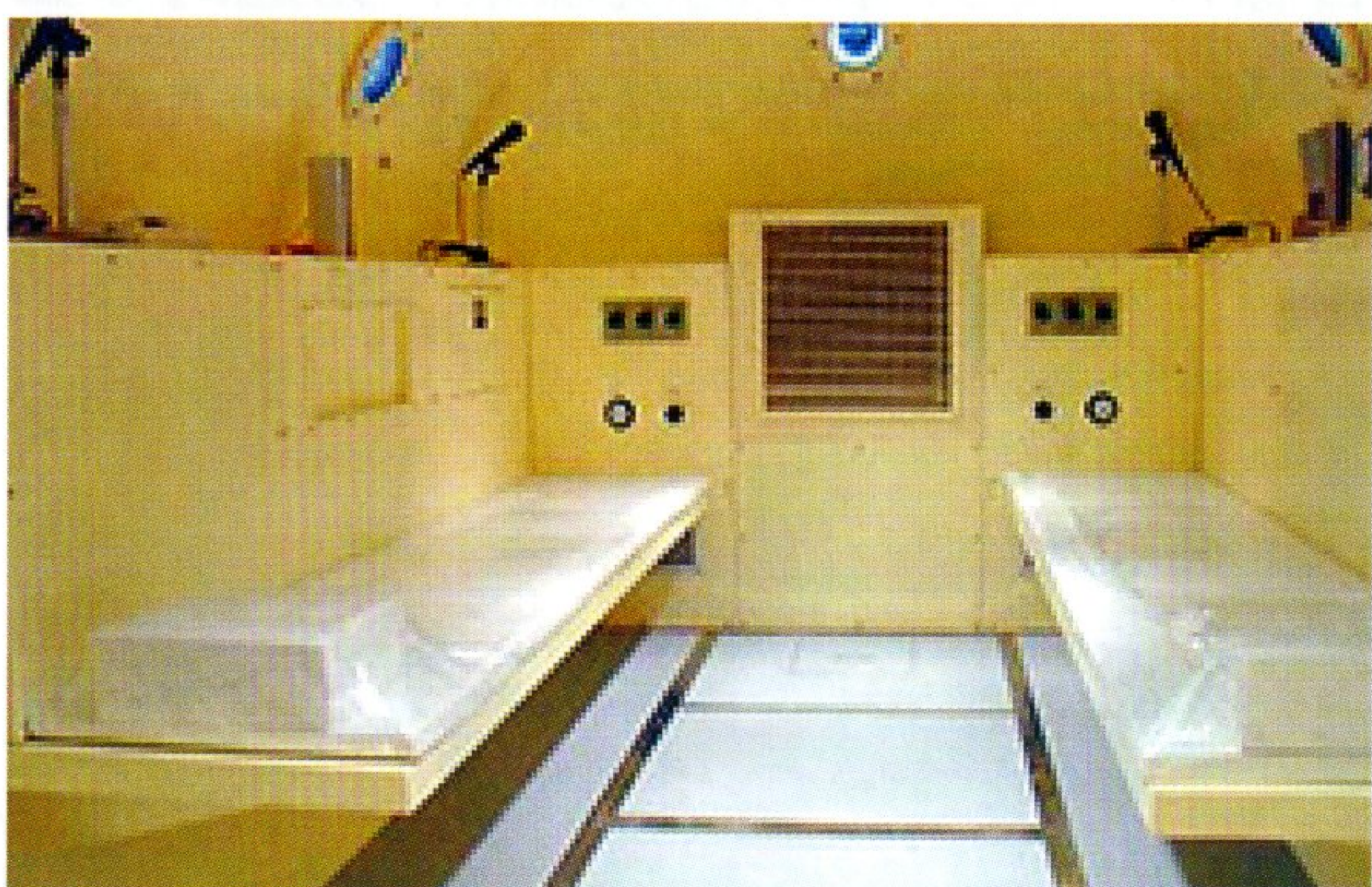
『水滴は岩をも穿つ』を表現したモニュメントが飾られています。

包括ケア病床33床)を有し、整形外科の専門性をより高める一方で、介護老人保健施設、サービス付き高齢者向け住宅を併設して地域包括ケアの推進にも力を注いでいます。また、大腿骨骨折の地域連携パスの拠点となる地域リハビリテーション支援センターとして、地域の医療機関との医療連携も強力に推進しています。

■臨床研究が病院全体をレベルアップさせる



大型の第2種高気圧酸素治療装置。注射や手術などの痛みを伴う侵襲性がなく、患者さんの治癒再生能力を引き出すものだそうです。



高気圧酸素治療装置の内部。複数の患者さんを同時に治療できます。



3Dプリンターで造形したオーダーメイドの大腿骨側膝関節モデル(写真左)と、手術の時に使用する専用の器具の骨切りガイド(写真右)。

同院の高度な専門性を象徴する医療が、骨髄炎や難治性潰瘍、脊髄神経疾患などの患者さんに装置の中で酸素を吸入させる高気圧酸素治療です。大型の装置3台を設置し、30年間で3,000例を超える実績を上げ、県外からも多数の患者さんが来院しています。川島先生は労働福祉事業団九州労災病院(現・独立行政法人労働者健康福祉機構九州労災病院)の勤務医時代に、潜水士の骨壊死治療に高気圧酸素治療を多用していました。「潜水士になぜ骨壊死が多いのか、原因を究明すべく研究に取り組み、開業後に国際学会でウィスコンシン大学から共同研究の申し込みを受けました。有明海の潜水士300名の潜水パターンのデータを渡すと、同大は羊500頭を使って骨壊死を発症させる実験に成功し、そのメカニズムが解明されたのです」。先生は現在、日本高気圧環境・潜水医学会代表理事を務め、国際学会も中津市で開催しました。

このような川島先生の姿勢は、病院全体で先進医療や臨床研究に取り組み、論文執筆や学会発表を奨励する風土を育みました。膝の人工関節置換術では、3Dプリンターを活用した先進医療“実物大臓器立体モデルによる手術支援”の認定施設となっています。また、九州で2番目にモニター付き関節内視鏡を導入したことも特筆できることです。「先進的な取り組みが、優れた医師の確保、大学や中核病院とのパイプづくりにも役立っています」。さらに最近、同院が医療応用研究に関わっているオゾンナノバブル水が脚光を浴び始めました。その殺菌力を生かして、皮膚潰瘍や骨髄炎、糖尿病性足病変、化膿性関節炎などの洗浄に利用し、骨髄炎では高気圧酸素治療と併用して良好な成績を残しているそうです。「まだ、研究段階の医療ではありますが、大きな可能性を感じています」と川島先生は今後の展開に夢を膨らませています。

(2015年10月取材)